

21 世紀の生命を育む

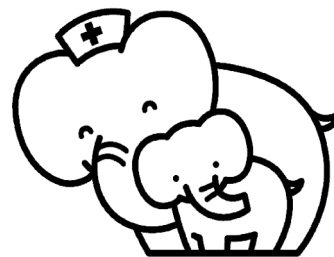
はしもと小児科

〒954-0112 見附市上新田町 449-7

TEL 0258-61-2400, 予約専用 61-2401, FAX 61-2402

<http://www.mynet.ne.jp/hasimoto/>

院長 橋本尚士：新潟大学医学博士，日本小児科学会認定小児科専門医，日本アレルギー学会認定アレルギー専門医
日本小児感染症学会推薦インфекションコントロールドクター（感染制御医：ICD）



ぞうさん通信 2010.7.6

はしもと小児科ホームページ <http://www.mynet.ne.jp/hasimoto/>

メールマガジン「ぞうさん通信」発刊中。上記 HP よりお申し込みください。

「おしゃぶり」を考える

日常診療で「おしゃぶり」をしているお子さんを見掛けます。「おしゃぶり」の使用の是非を質問されることもあります。「おしゃぶり」の使用をどう考えたらいいのでしょうか？

おしゃぶりの使用と乳歯の噛み合わせとの関係を調べるために、1歳6か月児，2歳児，3歳児，5歳児歯科健康診査に来院した1120名について調査したところ，2歳児ではおしゃぶり使用群で開咬（奥歯で噛んでも前歯が開いてすき間ができる状態）が高頻度にみられ，5歳児ではこの傾向がさらに増大したと報告されています。4-5歳の小児432名についての調査でも，おしゃぶりを年齢が高くなるまで長期に使用すると乳前歯部が開咬となりやすいという結果が得られています。いずれの調査結果も，おしゃぶりを長期に使用すると噛み合わせに悪い影響を与えることを示しています。

前述の調査によれば，おしゃぶりの使用は3歳になると急激に減少します。おしゃぶりの使用を2歳頃までに止めれば噛み合わせの異常は改善します。しかし，乳臼歯が生え揃う2歳6か月さらに3歳過ぎまで使用していると噛み合わせの異常が残ってしまいます。

おしゃぶり使用の利点としては，簡単に泣き止む，静かになる，入眠がスムーズになる，母親の子育てのストレスが減るなどが挙げられています。しかし，おしゃぶりの販売宣伝に使用されている「鼻呼吸や舌や顎の発達を促進する」ということは，現時点では学問的に検証されていません。一方，欠点としては，習慣性，長期間使用すると噛み合わせが悪くなる，子どもが泣いている理由を親が考えなくなる，あやす機会が減る，言葉掛けが減る，ふれあいが減る，発語の機会を奪うなどが挙げられます。5-6か月以降の乳児はなんでも口に持って行ってしゃぶります。これは目と手の協調運動を学習するとともに，いろいろのものをしゃぶって形や味，性状を学習しているのです。おしゃぶりを使用していると手で掴んでも口に持っていくことができず，このような学習の機会が奪われることとなります。親の働きかけに対する声出しや，自分からの声出しもできません。おしゃぶりは一度使用すると長時間にわたり使用する傾向があるので，発達に必要なこのような機会が失われることとなります。しかし，おしゃぶりが愛着形成を阻害するという意見について学問的根拠はありません。

結論としては、「おしゃぶりは出来るだけ使用しない方がよい」ということとなります。やむを得ず使用する場合には、咬合の異常を防ぐため、(1)言葉を覚える1歳過ぎになったらおしゃぶりのフォルダーを外して常時使用しないようにする、(2)遅くとも2歳半までには使用を止める、(3)おしゃぶりを使用している間も声かけや一緒に遊ぶなど子どもとのふれあいを大切に、子育ての手抜きや利便性からだけでおしゃぶりを使用しないようにする、などの注意が必要です。

(*2005年1月12日、日本小児歯科学会「小児科と小児歯科の保健検討委員会」発表、「おしゃぶりについての考え方」(http://www.jspd.or.jp/public/about_pediatics_04.htm)より引用抜粋。)

ぞうさん通信2010.7.6, 見附市上新田町449-7 はしもと小児科, 院長 橋本尚士
新潟大学医学博士, 日本小児科学会認定小児科専門医, 日本アレルギー学会認定アレルギー専門医
日本小児感染症学会推薦インфекションコントロールドクター (感染制御医:ICD)